

領域外神域

osi7



もくじ

誰かのプロローグ	11
天満寺ちゃんの9時30分	14
七重ちゃんの10時30分	38
円ちゃんの12時00分	70
天満寺ちゃんの15時30分	91
七重ちゃんの15時00分	105
天満寺ちゃんの15時45分	114
七重ちゃんの16時30分	134
円ちゃんの16時30分	140
デッドエンド☆ミ	157
ハッピーエンド☆ミ	174
私のエピローグ	190

誰かのプロローグ

御坂の町は古くから二柱にはしらの神に支配されている。海の神と山の神だ。

海の神と山の神は人がこの地に来るよりも前から、ミサカの土地を巡って争っていた。それは人が土地を耕して町を興してからもしばらく続いた。

山の麓に最初の獵師の庵が出来た年も、入り江の浜に海賊が隠れ家を作った年も、毎年戦は行われて巻き込まれた人間は死んだ。人の目から見れば超常現象だ。どうして死んだのかも知らずに息絶えた。

それから毎年のように戦に巻き込まれた人間が死んだ。神の争いに人が口を挟めるわけもなく、戦の前兆があると人間は家に籠もり、窓には板をはめてただじっと終わるのを待った。

大抵は一晚か二晩で終わった。じっとしていれば何もなくなると信じていた。そうして堪え忍んでいた人間たちだが、ある年の長い嵐のような戦で、生まれた幼子のほとんどが死んだ時、町の人間は

神の争いを終わらせようと海と山に社を建てて崇め奉り、どうか争いをやめてくれと懇願した。

嘆き悲しむ人間の声を聞いた二柱の神は弱い人間を憐れみ、しばらくの間は争うのをやめて一年を分けて支配することを約束した。

そして、山の神は秋と冬の間、海の神は春と夏の間を支配することになった。支配している間はその神の力がミサカの土地を覆い、神意を示す。

夏の盛りは海の神の力が強いので、海から多くの霧がわき上がって麓までを覆う。だが、霧と霖雨で作物が腐るのは困る。町の人間は山の神の所に行き、風で霧を吹き払ってもらえないかと神を欲待し祈願する。これが夏至の祭だ。

逆に、冬には山から雪降らしの雲がやってきて麓を雪で覆い尽くす。町は風雪に閉ざされて漁に出ることもままならなくなる。中には寒さで死ぬ者もいる。町の人間は春の暖かさが早く戻るように海の神に供物を捧げて頼る。これが冬至の祭だ。

御坂神社は矢狩山やかりさんの中腹に位置し、山の神を祀る。そこで行われる夏祭りは今も大々的に行われるイベントだ。しかし、海の神を祀る神社は御坂市内にあるといわれているが、名前も忘れられて所在も不明である。故に冬至の供宴は采配する者もなく久しく途絶えている。

円彩月まどかつきという子がいる。私のクラスメイトで最近話すようになった。

誰にでも敬語を使ったり、妙に人のことを探るような話し方をするので、前はあまり好きじゃなかった。可愛いし話してみるとよく合わせてくれるので一緒にいると楽しいが、じっくり話してみるとそういうキャラ立てなのかわざとらしい返答が多い。アホな話題を好み、うわべだけで楽しむ事をモットーとする私達を、表面上はあわせながら、でも内心では見下しているんじゃないかと思ってた。

でも。

「天満寺さんって、何か不思議なこと、体験してませんか？」

先月、こんなことを言ってきた。私が魔女の奴隷になったあとのことだ。

不思議なこと、なんてとても抽象的な表現だけど、手も触れずに人の腕を止めてしまったたり、焼却炉の扉を全然違う場所につなげて見せたり、そんなことを目の前で見せつけられたことの

ある私は、少なからず動揺した。いや、動揺なんて表現は生ぬるいかもしれない。

フラッシュバック。

親友だった人の声が蘇る。笑顔で言った言葉でも、胃をぎりぎり締め上げる万力に等しい。酸っぱい臭いが喉の奥に溜まった。

あの赤い部屋のなかで会った二人の友人はそれっきり影も形も消え失せてしまった。クラスのみんなは、担任や教頭が言った『よくある中学生の家出』というストーリーを鵜呑みにしている。

ほんの数週間前は一緒に勉強していたクラスメイトなのに、もうだれも彼女たちのことを話題にしたりしない。興味本位で彼女たちの行方を私に聞いてくるような野次馬もいなくなった。大人しく、しおらしく、何も知らないフリをする必要もなくなつて、私も気が楽になってきた矢先なのに。

不意打ちのような言葉で、私の心は乱されたが、それでも感情があふれ出す寸前で平静を取り戻した。

「……こんなところに呼び出しておいて、いきなり変な質問しないで」

ぴしゃりと一言って呼び出された屋上からでようとすると、腰にタックルされた。コンクリー

トの固い床に二人で転がる。

いきなり攻撃されるなんて思ってた。円は私に馬乗りになると、押しつけようと暴れる私の両手を押さえつけて睨んできた。

「知ってます。理科準備室の件も、篠原さんに宮川さんに霧上さん、そして倉池さんがいなくなっただけ、私は知ってます」

目に、尋常ではない光が宿っていた。びくびくと神経質に揺れる瞳孔とまるで呼吸困難に陥ったように苦しげな表情で。

「あなただけが生き残った。なぜですか？ 最近、よく坂木先輩と一緒にいますよね？ 今まで接点なんてなかったはずですよ」

円は小柄で軽い。押し返せるはずだった。

「私は知らない……！」

なかったことになった私達だけの事件を、知っているという円彩月。いないことを日常として受け入れた私やクラスメイト達を糾弾する人が現れて、防ぎきったと思った感情の波がまたうねりだした。

そして壁を壊してあふれ出す。

反論にもなっていない事を吐き出した。

「みんなが消えた理由なんて知らない！ 消えなきゃならない理由なんてどこにもなかった。

私だけ何もなかったかのように過ごせる理由もわからない。だけど、知ってたとしてもあなたに教える理由もない！」

私は自分の胸をざわめかせる感情の名前は知らなかった。

だからあふれ出した思いがそのまま口に出た。

それは義務を果たす誇りに近かったのかもしれない。

ぼたり、と私の頬に何かが滴った。

円は、私を睨みつけていた目を閉じ、顔を伏せ、私の胸に頭を乗せた。

続く言葉は、全く、理解の範疇を超えて意味不明だった。

「苦しいんですよ……胸が、すく。なにかあったはずなんです。でも覚えてない……わかりますか？ 知りませんか？」

急に泣き落としのような懇願が変わった。

人の上に馬乗りになって、吐き出させた言葉を受けてそれか。腹が立った。結局、こいつも言うべき相手ではなかったのか、と腹の底が冷えていく。

だが、冷え切らない何かもあった。その質問に、好奇心や野次馬根性ではない何かを感じたからだ。

「覚えてない……わかりますか？」

その何かは、胸にだけピンポイントに突き刺さるような変なしこりを落とした。

彼女が何のことを言っているのかわからない。赤い部屋ではない、私の知らないところで彼女も何かつらい目にあつたのか。

彼女も私と同じように何かから逃れて一人生き残つたのか。

「……知らないわよ」

胸に残るしこりが私の腕の力を萎えさせ、押しつけることもせずに胸を貸していた。

あどとき、円は泣いていたのだろうか？ 別に制服が涙でベタベタになっていたということとはなかつたのでそんな事実はなかつたはずだ。

とにかく、私と円はいきなり濃い心情の吐露から友人関係をスタートさせた。

次の日の朝は、学校で目を合わせたらなんて顔をすべきかずつと悩んでいたのだけど、教室に入った私に一番最初に挨拶してきたのは円だった。

「おはようございます、天満寺さん」

「……おはようございます、円」

昨日のことは綺麗に忘れ去つたのか、神経が大変太くできているのか、にっこり笑うと私と一緒にお昼を食べたいなんていいたのだった。

壁掛けのアナログ時計は、ちょうど九時半を示していた。あと十分に迎えが来る。

誰かが使った制汗剤の香料がうつすら匂う脱衣所で、私は急いで制服を脱ぎはじめた。慌ただしくチャックを外しながら、となりでどのロッカーを使おうかとじっくり品定めをはじめた円を急かす。

「どのロッカー使っても変わらないから早く着替えてよ。これ着るの手伝ってもらわないとならないんだから」

「変わりますよ！ 汚いところ使いたくないですし、変な臭い移ったら気持ち悪いです」

「ここ女子更衣室。そこまで気にしなくてもいいんじゃない？」

「女子だろうと男子だろうと、嫌なものは嫌です！」

とりあえず脱ぎかけのスカートを足から抜いてロッカーの中に放り込んだ。そして、綺麗そうなロッカーを吟味する円の手から鞆を取り上げて、適当なロッカーを開いて中に放り込む。

「ちょ、ちょっと何するんですか！」

「うるさいわよ。四十分に迎えの人が来るって言われたでしょうが。あと五分しかないのわかってるの？」

「いいんですよ少しくらい待たせても！」

友達のよしみで紹介されたとはいえ、給料が出ているので歴としたアルバイトだ。しかも、私にとっては人生初の勤労である。相棒の妙なこだわりのせいで初日から時間に遅れるとかは避けたい。

「アホなこと言わないで。着替えが間に合わなかったらおいていくからね！」

「ええー」

情けない声をあげる円は無視して、渡されている衣装を手取る。レンタル品なので誰かのお古なのは間違いないが、変な臭いはしないし黄ばみとかも特に見あたらない。私も円のいうように、妙なおいがしたり汚れていたりする服は着たくないが、神様をお迎えするために清浄な場所を作っている神社で、その備品が清潔じゃないとか存在意義に関わるだろうし、そこ

は信用することにした。

それにしても人生初の勤労が、地元最大の神社である御坂神社みさかじんじゃの香霧祭かぎりまつりのお手伝い巫女とは、これから長らく続くであろう勤労人生において重要な意味を持っている気がしてならない。具体的に言うと、御利益で良いところに就職できたりとか、御利益で三十代に巨万の退職金を得て残りの人生を余暇で過ごせるとか。

そんなわけではないか。

白衣はくいはくま緋袴ひかまを、それと一緒に渡されたメモ用紙に従って着ていく。長い白衣を胸の前でしっかりとクロスさせて、赤い袴の紐をしつかり縛る。ちょうちよ結びがちよつと歪んだが許容範囲におさめた。初めてにしては上出来上出来。

制服をたたくでロッカーに入れて後ろを振り向くと、円はまだ白衣を着たところだった。時計の針は限りなく四十分に近い。

「ちょっと、早く着てほしいんだけど！」

「見ないで手伝って下さい……！ この帯逆じゃないですか？」

白衣を止める帯なんて見えなくなるんだからどちらであろうと関係ない。

「かしてっ！」

適当にずれ落ちないようにぐるぐる巻いてきつめに縛る。

「……あの、少しきついです」

「そういうものらしいわ」

続けて緋袴をつけさせる。時間もなしと縛ってしまった。きつめに。

「す、少し苦しいです……」

「かわいいわよ。ちよつと袖握って回ってみて」

円が白衣の裾を握り、くるりと回る。おかつば黒髪で小柄な彼女が可愛らしい巫女装束に包まれて、ちよつと一般的ではない審美眼を持つ私に言わせてもらっても文句なしの大和撫子ができあがっていた。

「本気でかわいいわね」

「二回言われると嘘っぽいです」

眉間にしわを寄せても可愛い。なぜそこで上目遣いに睨んでくるのか、私の劣情を煽っているのだろうか。

「あとは足袋ね。持ってきた？」

「もちろんです。あの、髪の毛はそれで良いんですか？」

私の頭を指さして円が言う。左右の側頭部で揺れる髪の毛のことか。俗にいうツインテールで、私のトレードマークである。高校生になろうかという年齢でも申し分なく似合ってしまう自分の幼さは強みであると同時に悩みの種でもあった。

「髪型については特に何も言われてないじゃないか。注意されたら下ろせばよくない？」

「いえ、色です」

そつちか。

私は実は黒髪ではないのである。染めたようにしか見えない栗毛だが、染めたことのある人が見れば一目瞭然でわかるムラのない綺麗な色だ。つまりハンパなく目立つ。

「地毛よ、地毛。文句言われる筋合いはないのよ」

「およそ神社にはあるまじき色合いです」

「自然であることを否定するのは神社に勤めるものとしてどうなの」

鏡を見ながら、せめて髪型だけでも目立たないようにしたほうがいいのか迷う。下ろしたところで癖毛のために末広りのふわふわヘアになる。これ以上ロリータに磨きをかけることは目的とそぐわないのではないか。

コンコン、とドアを叩く音がした。

「着替え終わったー？」

知らない女の人の声が聞こえた。迎えの人か。

「終わりましたー」

円が答えてドアの鍵を外す。せっかちに開いたドアから金髪の少女が飛びこんできた。私達と同じか少し上くらいの年齢と見える。

「終わったら早くこないと。もう、打ち合わせ終わっちゃったよー」

時計を見てもまだ四十三分くらいである。

「ええと、私たちは四十分間に合えばいいって言われてきてたんですけど……」

「なにそれー、そんな遅く出てきても良いような役目の人いたっけな」

金髪の少女は、私よりも一回り背が小さく猫のような大きな碧眼で、サラサラした金髪を肩毛で一直線にしていた。私以上に神社に似つかわしくない髪の色だが、頭の左右でお団子を作っているところが古代日本の髪結いにも見えて、かろうじて和洋折衷と言えなくもない。

腕を組んで首を捻っていたが、その姿勢は十秒ももたなかった。

「ま、きけばわかるでしょ！ 準備できたなら行くよー」

「あ、私は大丈夫です」

円が外に出る。私も財布と携帯端末を巾着に入れて外に出ると、目の前が乳白色に覆われた。……霧、すごいですね。来る時より濃くなってませんか？

「ほんと、これじゃ前が見えないわ」

女子更衣室は祭りの期間だけ作られるプレハブ小屋の一つである。社務所の裏手にある空き地に立っており、この空き地には私たちのように臨時の手伝いをする人のためにいくつもプレハブ小屋が造られていた。スタッフ用の炊き出しや警備の本部、打ち合わせ会議室などがあつてこの空き地の大半は建物のはずだが、濃すぎる霧に遮られてしまい、更衣室のプレハブが見えるだけで周りにまだ何かあるなんてわからない。

「このへんはまだ麓に近いからさ。霧も濃いんだよねー」

少女は帯と白衣の隙間から鍵を出すときも音もなく鍵穴にすべり込ませて扉をロックした。音もなくシリントが回転する。

「海からわき上がってる霧だから、街のほうは映画に出てくるゴーストタウンみたいに霧が漂ってて雰囲気すごいわ」

鍵を懐にねじ込んだ少女はくると振り向くと、にっと歯を出した。

「そういえば自己紹介がまだだったね。私は白波瀬ヒミカ。今年の新人を世話してるから何で

も聞いてねー！」

最後にウイंकまでするあたり、舞台上上がったアイドル並みにテンションが高い。

「あ、どうも。天満寺琴乃てんまんじことのです。お世話になります」

「円彩月えんさいづきといいます。よろしくお願ひします」

現役中学生の我々は声もテンションも低く、お辞儀もおざなりである。

「よろしくねー！ さて、とりあえずみんなの集まってる場所までいくからついでー。はぐれんなよ！」

私と同じくらいにしか見えないが口ぶりからするとベテラン巫女らしい白波瀬さんに、円が質問する。

「白波瀬さんって、外国のかたなんですか？」

「あ、やっぱり気になる？」

ゆつたりとくぐられた金髪のお団子を指先で触る。

「親が外国人って言うだけで、私は生粋の日本人よー。生まれも育ちもこの御坂！」

「ああ、そうですよね。日本語が凄く上手でこれで外国の方だったら自信なくします」

「心は思い切り日本人んだけど、この格好でしょ？ 知らないじいさんばあさんの前に出る

とうるさ五月蠅く言われるんだー。祭りの時にしか来ないあんたらより私のほうがよっぽど長く神社にいるっていうのー！」

えへっ、と舌を見せる。

「だから大きな祭りの時には裏方で人前には出ないようにしてるんだけどね！」

「私も生まれつき明るい髪の色なんで、白波瀬さんみたいな人がいてくれて助かりました」

会話に混ざると、白波瀬さんは首をかくりとかしげで自分の髪を触っていた指をわたしのツインテールに這わせた。

「えっ、この茶髪、地毛なのー？」

「そうです」

「わー。神社に奉公に来るのに髪染めたまま来る今時の子かと思っちゃった。ごめんねっ！」

「いえ、やっぱりそう思いますよね」

「あなたもあまり参拝客の前に出ない方が良いかもねー」

「それじゃ、お客さんの前に出なきゃいけない仕事は円にお願ひするね」

「ええっ！ いやですよ一人なんて！」

円の悲鳴でびたりと白波瀬さんが足を止めた。

「もしかしてあなた達、七重ちゃんのお付きで来てる人たち？」

「はい、そうきてますけど」

私と円の二人は、魔女の片割れである坂木七重さかき ななえにお祭りの手伝いをするように仰せつかってここに来ている。魔女のくせに神社の跡取りで、しかも神様に一番近い立場らしい坂木先輩はわけがわからないほどに複雑な立場だが、祭りのクライマックスに行われる儀式は全体を通して一人でしなければならぬそうだ。どんな儀式でなんの意味があるかは全く知らないが、補助的な役割をする巫女が二名必要と言うことで、夏休みの間暇している円と別に暇ではないが、魔女の奴隷としてこき使われる私に白羽の矢が当てられたのであった。

「なんだそれを早く言っつてもー！　じゃあ、こっちきてこっちー！」

Uターンしてさっきの更衣室に戻ってきた。

「今あなたたち、ブラとかパンツつけてるわよね？　肌襦袢はだじゆばんも着てる？」

「つけてますけど……。肌襦袢はないです」

白波瀬さんは更衣室に入っついで、ロッカーの奥に詰まっていたクリーニング済みらしきビニールに包まれた白い着物を取り出してきた。

「今着てる白衣と緋袴は脱いで、下着も全部脱いで、これに着替えてね」

「これは？」

「これが肌襦袢よー」

うん、それはわかるんだけど、ちょっと薄すぎませんか。肌色透ける気がする。

「何か上にはおる物とかないんですか？　これを来て外歩くのは勇氣入ります……」

円も言うが、白波瀬さんはカラカラと笑った。

「大丈夫大丈夫、こんな霧の中じゃ何も見えなくて。それでも気になるっていうなら白衣を上に着ておけばいいよ」

肌襦袢は、着てみると綿生地サラシのような感じで、最低限の慎みが守られるようなレベルであってやはり心許ない。私も円も無言で白衣を着た。

「坂木先輩のお付きはこの格好じゃないとダメなんですか？」

「これはお付きとかそれ以前のお話だよ。あなた達は祭場で神様の近くまで寄るから襦むすぎをしないと駄目なの。お風呂は入ってきたのかも知れないけど、境内の中でもう一度清めないとね。裸になれとはいわないから、肌襦袢の上からお湯かけてあげる」

ああ、なるほど。びっくりした。本番になったらまた襦袢にならないといけないのかと思った。

「脱いだ下着と白衣緋袴はこの袋に入れて持ってきてね。また着るからー」

スーパ―の名前が印刷された半透明のポリ袋を渡された。白波瀬さんはおおざっぱな性格なようだ。

私たちは無言で自分の鞆に服を入れはじめ。

白波瀬さんは外に出ると入るときと同じように音もなく鍵をかけ、私たちは鞆で体の前面を隠しながらその後につき従う。霧は確かに濃く、密集したブレハブ小屋の間を風に乗ってたゆたう。太陽の光は厚い水蒸気の層に遮られてぼんやりとしか届かず、まるで海底を歩いているかのような気分になる。

前を歩く鮮やかな緋色の袴を目印にしばらく歩く。社務所の横を抜けて境内を横切り、鳥居の横も歩いた気がする。周りから人の声が多く聞こえたが、うつむき加減にそそくさと通り過ぎた私たちに気づく人はいなかった。石畳で舗装された参道から外れて草履が玉砂利を鳴らし、それが黒い土を踏み固めた細道になる。喧噪は絶えて、鳥の鳴き声や風が草葉を揺らす音しか聞こえなくなつたところで、おずおずと円が口を開いた。

「……あの、どこまでいくんでしょうか？」

「もう少しだよ。その垣根を越えたらすぐ」

白波瀬さんが指で示した通り、鬱蒼うつそうとした草木を区切るような垣根が現れた。小径はその垣

根にわずかに開いた隙間に続いている。唐突に、不思議の国のアリスを連想した。あそこをくぐって出てくるのはニヤニヤ笑う猫か予言者のような青虫か。茶会ならお呼ばれしても良いかもしれない。ちょうど喉が渴いてきたところだし。

だがもちろん、垣根を越えてもそんな物はなく、そこはごく常識的な庭の一部であるようだった。白波瀬さんはどんどん進んでいく。庭があるということはここは何かの建物の敷地内であることは想像に難くなく、そこに頓着なく入っていくのは大変マズイ気がする。

「ここって誰かの家なんじゃないですか？ 黙って入っても大丈夫なんですか？」

「いーのいーの。問題ないわよ」

軽く答えられる。そこまで言われてしまったらついていくしかない。

そう思って奥に消えた緋袴を追うと、霧の奥から白い建物が現れた。白波瀬さんは玄関の前で私たちを待っていた。

「はい、ここです」

「これ、白波瀬さんの家、ですか？」

思わず疑問系になる。だって家というには小さすぎるのだ。例えるなら公園とかにある公衆トイレぐらい。四畳半のワンルームより一回り大きくなってレベル。こんな所に住むなんて、

座敷牢に入れられてるのと変わらないんじゃないだろうか。

「はい？ そんなわけないでしょー。これ襦き専用のお風呂だよ。すごいよー、わざわざ山を流れる襦きの滝から水引いてるんだから」

「お風呂？ この建物が？」

「しかも七重ちゃん専用のお風呂だよ。あなた達は七重ちゃんの友達だし、使っても良いって」風呂専用の建物を別に用意するって……。別にする意味がわからないんだけど。

玄関を開くとすぐ脱衣所になっていて、かごが一つ置いてある。私と円は顔を見合わせて、脱いだ白衣と髪をとめていたゴムは自分の鞆の上に置いた。白波瀬さんがかごの中に新しいバスタオルを二ついれて、お風呂の引き戸を開く。一人用だけあってそんなに中は広くないようだった。湯船には湯が張りっぱなしなようで、外と同じように煙っていた。

髪の毛が湿気を吸ってぞわぞわと体積を増しているのを感じる。

「そんなに広くないね……。でも体洗うわけじゃないし、いいか！ 二人とも入って入ってー」脱いだ足袋もたんで白衣の上に置き、急かされて中に入る。男らしく裾をからげ、旅館の仲居さんのように袖を紐で縛った白波瀬さんは、桶にお湯をひとすくいすると手を入れて温度を確かめた。

「うん、まあちょっと熱いけど、大丈夫大丈夫」

もう一つ桶を手にとつてざぶりとお湯を満たす。

「あの、別にお湯かぶるくらいなら自分で出来ますけど」

「いいのいいの！ 二人とも可愛いから私が手ずからしてあげる！」

なんだろうこのテンション。

「はあ……。恐れ入ります？」

お風呂場に二人並んでしゃがむ。温度のわからないお湯をいきなりかけられるのはちょっと怖い。

そんな気持ちを知ってか知らずか、きよめたまえーはらいたまえーと謎の呪文が後ろから聞こえると間髪入れずに頭からお湯をかけられた。

首筋がカッと火照って体がびくんつと反応した。肌襦袢が水を吸って体に張り付き、腰から足へと伝わっていく。

ちよつと気持ち悪い。

「それもういっちゃよー！」

二回目も頭から勢いよく。一瞬だけ熱いのが通り過ぎ、布が重量を増す。おしりから太もも

の裏を伝う水の一筋がすごく気持ち悪い。

「ちょ、ちょっと、褌ぎってこんな乱暴で良いんですか?」

円が常識的な問いを投げるが、三杯目を湯船からすくう白波瀬さんは白い歯を見せた。

「全然問題ないよー! 清めの儀式は俗世の埃を落とせさえすればいいの! それに濡れた二人はすごく可愛いし!」

元々薄い生地にくっつきりと肌の色がうつって可愛いというか淫靡いんぴな印象だけど、神事の一部がこんなはしたなく、しかも軽いノリで良いんだろうか。

「もうちょっとゆっくりにお湯流してみようかな」

ちよろちよろと頭からゆっくりにお湯を流しはじめたが、

「あたた、腕疲れてきた」

という言葉と共に残りが全て空けられて視界がふさがる。

不意をうたれて鼻の奥に水が入った。つーんと痛みが目の奥に抜ける。

「簡単だけど、こんなもんでいいかな」

「……褌ぎって、滝とか川とかの冷たい水を使って肅々とやんじゃないんですか?」

べったりと顔に張り付く髪を後ろにやりながら呟くと、円もこくこくと首を動かして同意を

示した。

「わかってないわねー。巫女という仕事を」

ちゅちゅちゅと指を左右に振る。

「あなた達は巫女というのを修験者か何かと混同してるわねー。まず、神社というところは文字通り神の社、神様がおいでになる家で、巫女はいわばその使用人なの。いつ神様がいらしても失礼のないように境内を掃き清めることが、仕事の大半を占めてるのよ」

「神様のメイド……ですか」

「イエース。ご祈祷や舞の奉納があるときは別に褌ぎするし、そのときはちょっと普段と同じとはいかないけども、基本的にお風呂で体を磨くのはみんなと一緒。全然変わらないの」

「体を清めるだけなら、別に川とか滝でなくてもいいんですね」

「滝行なんてここの神社でしてる人いるのかなー? ま、そういうわけで、ここぐらいの大きさになると常勤の巫女も何人もいるし、祈祷の依頼もよく来るから専用のお風呂を作ってるわけ。このお風呂は七重ちゃん専用だけど、社務所にはちゃんと私たちも使える褌ぎ場があるのよ」なるほど。夏ならまだ良いけど、冬にも褌ぎはする。ご祈祷や神前にあがるたびに水をかぶっていたら間違いない風邪引きになる。

というか、お風呂は社務所にもあったのか……。

「私たちここ使って本当に良かったんですか？ 社務所にあるならそこでいいんじゃない」

「ああ、あつちは今ちょっと来客や氏子もたくさんいるから入れたくなかったんだよね……。あなた達も大勢の前でお風呂にはいるとかいやでしょ？」

「……それはまあ」

「……ちょっと恥ずかしいですね」

「でしょ」

白波瀬さんはまっと笑顔を浮かべたが、唐突に玄関のほうを見た。

「ん？ 白波瀬さん？」

三回のお湯かけで風呂場は湯気が充満し、明かり取りの窓から入る弱々しい光では顔は見えなかった。誰か来たのかと前を手で隠す。

「あ、ごめんごめん、私ちょっと忘れ物してたから社務所に戻ってるねー」

言うが早いか袖と裾をぱつとひと払いで元に戻し、玄関で草履をはき始めた。

「えっと、私たちこれからどうすれば？」

「ああ、そうね、とりあえずその肌襦袢は脱いで着替えて！ 濡れたものはかごに入れて

おいてね。その後は七重ちゃんに訊くか、私がまた来るから待ってて〜！」

「これ、着てなくても良いんですか!？」

「ごめん、肌襦袢着せたのは私の趣味！」

どたどたと玄関から出て行く白波瀬さん。空けた瞬間に霧が入ってきた。雲のような乳白色の中に消えていった。砂利を踏む足音だけが聞こえる。

「……趣味？」

「……女の子にわざわざ薄着させた上で濡らすのが趣味とは、変態ですね」

「変態じゃなくてフェチって言うらしいわよ、そういうのは」

「I hate this……」

板張りの上を滑るように進みながら、手に持った鈴を決められた拍子で鳴らす。

なめらかに次の動きに移れるように、足が床から離れないように足袋を擦らせてすすみ、止まった時はかかとは浮かせておく。そして腰を少し落として頭を垂れ、手首を使って鈴を振る。しゃらん。

顔を上げる。目線の高さは常に一定に。しかるべき時以外は首は横に振らず、常に視線は正面舞台をすすみ、回転し、しゃがみ、立ち、鈴を鳴らす。その視界のなかに、録音した雅楽を慣らすスピーカーと、いかめしい顔でわたしの神楽を見るお婆ちゃんと、興味なさそうに胡座をかいた女が順番に入る。

わたしは練習用の舞台で、本番前の最後のリハーサルを行っていた。物心ついてから繰り返し練習させられた舞だ。五分近く中腰のまますり足で歩き、非人間的な旋回を多用する、ダイ

エットにはすこぶる向いていそうなハードメニュー。この舞は氏子の前で披露するもので限られた人しか見せられないものではないのだし、動画に撮ってダイエットビデオとして売り出しても文句は出まい。本職の美少女が教えるジャパニーズ・シャーマンズ・ブートキャンプ。御利益パワーでゆるんだ体をシェイプアップ。大衆受けするとは思わないだろうか？

などと、益体もないことを考えながらもノーマイスで舞いきれるほどに体に染みこんでいるこの舞は、山の神がその息吹によって霧を吹き払い日の光が地上を照らす様を描く。香霧祭の一番重要な神事の舞だ。

「よしー」

お婆ちゃんがスピーカーを止めた。ぱんぱんと手を打つが、あれは拍手ではなくてわたしの気を抜かせないためだろう。重い運動させたのに休ませるつもりがないというのは、あと数時間後に同じ舞を踊らなければならないからだ。

でも一息つかせてほしい。

夏休み前に愚か者が何人か死に、気にかけていた後輩が最悪の結末を迎えた事案だが、その事後処理は先週完了したばかりだ。異界に消えた愚か者たちは、家出をして遠い地で生活をしているように偽装されている。警察に搜索願はすずにでているだろうが電子マネーの取引履歴

は数回しかなく、程なく追跡は不可能となり行方不明者リストに入るだろう。家出の動機も不明のため捜査は日常警らの範囲で行われ、偽装に気づく者はいない。

「このような一連の情報操作は、わたしともう一人の魔女によってしめやかに行われた。わたしは坂木家の当主で、神社と御坂市内を実質的に支配する企業の最高経営責任者である。実体たとえば、警察のデータベースに書き込まれた行動記録、発行した電子マネーと消費された口グ、遠い地のコンビニエンスストアのPOSシステムに登録されたID、その店の防犯カメラに現れるよく似た少女の手配。

すばらしき情報化社会。たとえ人の記憶はだませなくても、しっかりと残った記録が事実をねじ曲げて印象をねじ伏せる。コンビニエンスストアの店員は、『確かにその本人を見た』と証言してくれるに違いない。

かくして御坂学園内で発生した殺人と行方不明の事件は遠い首都圏での行方不明事件に姿を変えて、学園の秩序は保たれるのであった。

主に放課後を使って行われたこれらの作業は、神経を使う。機械は素直だが人は何をするかわからない。警察官が行方不明者の血縁で予想以上に捜査に力が入ってしまうとか、防犯カメラ

ラの写り方が悪くて判別できないとか。ミスのフォロワーや予防線の構築というのは繊細な作業である。わたしは学業である程度消耗した後にこれに臨む必要があったわけで、毎度異なるシチュエーションで発生したイレギュラーに対応するのは骨だ。

しかも家に帰れば、今日のこの祭りの準備のためにまた打ち合わせや稽古があるのだ。

頭脳労働と肉體労働のコンビ。

いい加減疲れる。文句も出るといふものだ。

「ぼちぼち見られるレベルになってきたじゃないか、七重。止まってから体が揺れる癖は直ったんね？」

「はい」

御坂神社の舞は余所さまと違って坂木家で代々受け継ぐ、それだけで立派な神事の一つである。香霧祭や他の祭事で奉納する舞は御坂神社の当主が行うしきたりなので、わたしの仕事である。本来なら祭事の采配に集中すべきだが、学生の身分であることもあり、だれにも代わることができない祭事以外、こと境内での諸事については先代当主である祖母がとりしきっている。祖母は御年八十だが、長年のシャーマンズ・ブートキャンプの効果か、今でもご神体である矢狩山を二時間足らずで踏破するほどの健脚と、食べ盛りのわたしと同じぐらいの健啖

を誇る、モンスターお婆ちゃんである。総白髪で顔はしわくちやだが背筋は伸びていてハキハキと話し、この分だとあと二十年は生きていそうである。

そして、その元気は目下私の教育に注がれているらしい。

わたしの母が神社を継がず、継ぐはずだったお姉ちゃんが雲隠れしてしまったせいで、お婆ちゃんの技術と智慧はすべてわたしが継ぐことになってしまったからだ。正直、重い。初めは姉妹で分担して継ぐはずだった舞も事実上の一子相伝となつてうっかり死ねない身の上である。もともとセンスのあつた姉ほどわたしは出来がよくないので、日々の神事、稽古はそれはもう厳しい。最近では帝王学のようなものの授業も始まつてしまい、時間に追い詰められて頭痛がするようになってきた。

お姉ちゃんはいなくなるまでは別に嫌いじゃなかったんだけど、今は恨んでいる。

「……………」

そのお姉ちゃんが残していったわたしの保護者が、さつきからお婆ちゃんの横でわたしを見ている女である。血縁関係はもろんなないので、お目付役と言ひ換えたほうがいいかもしれない。だがその容姿は、我が国固有の文化を代表する巫女の勤務地とは全くマッチしないハイカラさである。

浴衣を着ているので、それだけならほとんどの人が和装である神社においては目立ちはしないはずなのだが、砂色の髪を無造作に垂らしているとなると話は別だ。別に外国人ではないが、さらさらと光を透かす金色の髪は地毛である。地毛なので、海の底のような深い青をした眼を縁取る睫毛も、細い弓形の眉も同じく褪せた金色だ。

さらに、立ち上げればすらりとした細身のシルエットのくせに出るところは出ており、百七十の高身長と相まってモデルと言われても違和感ない。顔は小作りで、すっきりシャープな印象を与える目と隙のない造作のせいで凛とした印象がある。しかし、今は胡座をかいて半眼でわたしを眺めているところからすると、退屈で眠いのではないだろうか。

何しに来たんだろう。暇ならわたしの代わりに境内を掃いてほしい。

「腰も据わってきたし、良い仕上がりだ。あとは本番でしくじらないように気を入れな。時間通りに来るんだよ」

お婆ちゃんは立ち上がり、砂色の前を素通りして襖ふすまを開けて出て行った。氏子の総代とこれから行う登山の打ち合わせをしに行ったのだ。わたしはその間に部屋に戻って襖ふすまをしなければならぬ。

一人残った女が口を開いた。

「……舞の途中で毒づくのは本番ではやらない方が良い」

口の中でつぶやいた程度なのに、聞こえていたらしい。少し息を吐いて敬語で答える。礼儀と心情の板挟みで少しきこちなくなるのは仕方ないことだ。

「お婆ちゃんには聞かれてないです」

「私にきかれるのはいいのか」

心外だ、と眉をひそめて拗ねたような口調になる。

「よくはないです。でも、愚痴ぐらい聞いて下さい」

「神に舞を奉納している途中に愚痴を挟む巫女がいるか。そういうのを不敬というんだ」

でもこんな儀式は茶番っていうんですよ。

とは言わない。さすがに。

「……もういいです。わたしはこれから禊ぎして着替えなといけなないので、用事がないなら庭でも掃いていて下さい」

「御坂神社で一番神の近くにいる巫女が奉る神をこうも軽視するとは、お前の姉に任された私の面目は丸つぶれだ」

「わたしは頼んでませんから」

お婆ちゃんと同じように女の前を素通りして縁側に出、後ろ手に襖を閉める。

小さくため息を漏らして、木張りの床を鳴らしながら母屋に向かって歩き始めると、ひとつ目の角を曲がるよりも前に後ろから床を鳴らす音が聞こえた。振り向いて釘を刺す。

「……今日は忙しいので、あんまり構っていられないんです」

「別に構う必要はないさ。だが、今日はお前についていくぞ」

ついてくるって……。

今日の祭祀の内容を知ってて言ってるのだろうか。知らないはずはないと思うのだが。

「今日はいつもの練習じゃないんですよ。この神社から参道をずっとずっと歩いて頂上の本殿まで行くんです。しかも大勢の氏子を従えて」

「ああ、知ってる」

「そしてわたしは、立ち寄るそれぞれの祠ほらで舞を奉納しないとイケないんです」

「そうだな」

「つまり、あなたが横にいては気が散って集中できないので、留守番してして下さい」

「ダメだ」

わたしがこの保護者気取りの女の何が嫌かって、意味不明の理由でわたしに嫌がらせをする

ところだ。

「……なんで、ダメ、なんでですか？」

「それはまだ言いたくない。だが、今日はずっとお前について回ることにした」

ストーリーカーか。

「何の嫌がらせですか。よりによって本番の今日に気にするなどというのはムリです」

「それでも、気にするな。第一、さっきは失敗もなく舞っていたじゃないか。なら本番でも大丈夫だろう」

「練習部屋と神前の舞台を一緒に……って、もういいです」

議論の無意味さに気づいた。どうせコイツはなんと言われようといってくるのだ。ここで言い合っても時間ももつたない。わたしは会話を打ち切った。

今練習していたところは母屋にある。うちの家は矢狩山の中腹、鎮守の森の一角を切り拓いた場所に建てられているが、神社とそんなに変わらない高さにあるせいで二階建てにはできない。二階建てにできない理由はうっかり拝殿よりも高い位置に居ないようにするためだ。しかし、長い我が家の歴史のうちに使用人が十人をくだらない時期があったせいで、その人数を収容できるだけの広さを今も維持している。なんだろう、家の格のようなものを意識しているのだから

うか。平屋しか作れないところで誰も使わない客室を十数部屋も用意しているのは滑稽である。家を横断するために入り組んだ縁側を歩く。後ろからは相変わらずの足音。何も言わずについてくる。嫌がらせではなく、本気でついてくるだけのようだ。嫌がらせだったら早晩飽きて何か話しかけてくる。

「……………そういえば、今日はずいぶん霧が濃いですね」

「そうだな」

そういえば香霧祭は街を覆う霧を払う神事が元になっていたのではなかったっけ？

「わたしが舞ったらこの霧は全部消えるんですよね」

「少なくとも巫女からして神に毒づいたりしている間は無理だろうな」

文句も言えないとか堅苦しいことこの上ない。

母屋の端までやってきた。わたしの部屋は離れになっていて母屋とはつながっていない。勝手口でスリッパが備え付けてあるが面倒くさいし遠回りなので、母屋と離れの間にある大きな飛び石を置いてもらった。飛び石は離れの玄関に伸びているが、途中で枝分かれして襖ぎ場にも続いている。

裸足でその上を歩いて渡る。霧で表面がしっとりと湿っていた。足の裏に砂がついてざらつ

く。まるで雨が降ったかのようだ。

白い建物が姿を現す。これがわたし専用の禊ぎ場だ。お風呂といいかえても良い。禊ぎ場と言っても滝だったり川だったりはいらない。夏ならいいが、冬にそんな冷たい水をかぶっていたら肺炎は必至だ。かといって水道水ともいかない。当主が禊ぎをする水は矢狩山を源泉とする清水と決まっている。このお風呂は、お婆ちゃんの時代には実際に禊ぎをしていた清水につづく川より採取した水を引いており、それを瞬間湯沸かし器で適温にして毎日のお勤めに励んでいるのだ。朝晩二回、欠かさずに身体を清めて奉仕や祈禱を行っている。

「中に誰か居るようだぞ」

わたし専用であるはずの風呂場の中で何か物音がしていた。

「……清掃の人かしら？」

でなければ変質者だ。今までもなかったわけではない。

壁に立てかけられていた竹箒を手を取った。保護者はわたしの意を汲み、ドアノブに手を添えて開く準備をする。

「鍵は閉めてるはずなんだけどな………開けて」

ぱっと開く。同時にわたしは竹箒を槍のように構えて突撃した。

「きゃ！」

「ちよっと！」

見たことのある顔が二つ、こちらを見てすぐに前を隠す。

わたしのお付きとして雇った円と天満寺がそこにいた。

天満寺のど元に突きつけた竹箒をゆっくりと玄関の外に放る。どさっと地面に落ちる音は、閉められたドアに遮られてくぐもってよく聞こえなかった。

「……あんた達はここで何してるの？」

「……禊ぎです」

お風呂ですることはそれしかないね。

二人は濡れた肌襦袢を脱いでいるところだった。白い薄布が体に張り付いて、裾からぼたぼたと水がしたたっている。なかなか興味深い光景だがいつまでも眺めていられるほどわたしも暇じゃない。

とりあえず白衣を脱ぎ始めた。

「な、なんで脱ぎ始めるんですか！」

「うるさいわね、円。わたしも禊ぎするの。それよりなんでここを使ってるのよ？ ここはわ

たしの家よ。あなたたちじゃなかったら警察に突き出すところだわ」

「え、ここ先輩の家なんですか？」

円が素っ頓狂な声を上げる。

「知ってているんじゃないの？」

「いえ……」

「連れてこられたんですよ、白波瀬っていう人に」

天満寺はすでに平静を取り戻し、タオルで髪を乾かしていた。

「ごめん、誰だって？」

「白波瀬さんです。金髪の私達と同じくらいの背の」

これくらい、と手のひらで身長を示す。

「そう、そうです！ 私も天満寺さんもよくわからずに連れてこられたんですよ！」

一方、まだ床に水滴を垂らしている円。

「円、床濡れるから早く脱いで」

「あ、すいませんっ」

「新人の世話係だと言ってました。長く神社で働いてるようなこと言ってましたけど

……………ドライヤー借りますね」

遠慮なく人のものを使い始める天満寺。

「知らないな。金髪って、外国人？」

「違うって言うてましたよ」

髪のを手にとってドライヤーの風を当て、ばらばらと流す。毛先にいくに従って縮れる栗

毛がふわふわと背中に落ちた。

「そんな人をお婆ちゃんが雇うとは思えないけどね……。それにここに来て長いならわたしが

知らないわけないし」

「え、どういうことですか」

ドライヤーを止めて怪訝けげんな顔でこちらを向く天満寺。

「……………」

「……………」

しばし無言で見つめ合う。

「……………まあでも、普段は事務してるなら顔合わせてないかも。もしかしたら祭り限定で来てもらってる氏子の手伝いの人かもしれない。それならお婆ちゃんもわたしも知らなくて当然だわ」

「……ですよねえ。もう、先輩、怖いこと言わないでくださいよへらへらと二人で笑う。」

「え、なんですか？」

よくわかってない顔で円が口を突っ込んできたが、まだ下着も履いてないので無視した。「でも二人を探しに行く手間が省けたから良いわ。覗きたら今日の段取りを説明するからそれまでに服着てて」

からからと扉を開いて風呂に入る。

ちらっとみると、わたしの保護者はむつつりとした顔で玄関に背中を預けていた。

風呂から上がると、すっかり巫女装束に身を包んだ天満寺が円の髪をドライヤーにかけていた。

直毛でさらさらの黒髪は天満寺の癖毛と違い、乱暴にブローしても絡みもせずにつまみすぐ落ちる。天満寺はその様子を不自然なまでにじっくりと眺めていた。

「……あんたたちっていつも喧嘩してそうだけど、実は仲が良いよね」

「はい？」

「……別にそんなことないとおもいますけど」

「そう？」

保護者がわたしにバスタオルを放る。円と天満寺の上を飛んだタオルをキャッチして頭にかぶった。二人は自分たちの他に誰も居ないと思っていたので、何がおきたのか一瞬わからなかったようだが、入り口の方を向いたことでやっとそこに人が居ることに気づいたようだった。

驚いて声も出ないようなので、わたしが紹介する。

「この人はわたしの身の回りの世話をしてもらってるの。名前は」

「香川^{かがわ}キリカだ。学校では七重が世話になっている。よろしく」

——キリカは、わたしの声にかぶせて名乗り、軽く会釈した。

「あ、どうも……」

「私は円彩月です。失礼ですが、さきほどからそちらに？」

円が堅い口調でキリカに言った。

キリカは笑みを浮かべそうなくらい柔らかく答える。

「気づかなかったかな？ 七重と一緒に入ったんだが」

「全然気づきませんでした」

まだ呆然としている天満寺をつつく。

「天満寺、自己紹介」

「あ、ごめん。初めまして、天満寺琴乃といいます。七重さんと同じ学校の中等部に通ってます。今日はよろしくお願いします」

「今日といわず、これからもよろしく頼む」

「それで、香川さんは身の回りの世話とはどんなことをしてるんですか？」

円が突っかかるのを、キリカが適当にごまかしている。円は悪癖である不思議ハンターの血が騒いで、キリカが瞬間移動か地面から湧いて出たか、そんな超常現象の尻尾をつかもうと躍りになってるようだ。

まるで口論のようなやりとりを聞きながら髪の毛を乾かしていると、天満寺がそばに寄ってきて小さな声で言った。

「あの人って秋月さんですか？」

「……話し方似てるけど、別人。本人に言わないようにね、どっちに言ってもたぶん怒るよ」

キリカも秋月も、押さえたような声の調子で男のような話し方をする。身長も体の肉付きも似たような具合で、秋月が変装したと言えばそれで通りそうだ。しかし性格は正反対なので、しばらく話せば違いはわかる。とりあえず秋月は人に向かって『よろしく』とか絶対にいわない。

「秋月さんと知りあいなんですわね。ということは私のことも……？」

「いや、あなたのことは別にいってない」

そうですか、と軽く息をつく天満寺。

わたしが着替えを終えて髪も乾かし終わっても、まだ円はキリカに食ってかかっていた。うっとうしいだろうにそんな様子は露程も見せずにキリカはニコニコしている。

「はいはい、円もいい加減にしなさい」

「ちょっと、先輩！ こんな不条理を目の当たりにして黙っていられません！」

「黙りなさい。自分が何しにここに来たのかわかってるの？」

「別に私はかまわないぞ」

「余計なこといわないでください」

コホンと、咳払いをひとつ。

「それでは、円と天満寺の仕事内容を伝えるわ。」

今日は我が坂木神社で一年を通して一番大きなお祭りです、その中でも飛び抜けて重要な神事を行う日なの。香霧祭のそもそもの起源は、海の神様が起こす大海霧を山の神様に払ってもらおうとしたのが始まり。今では『霧追い』とまとめて呼ばれる。一連の神事だけど、一昨日の献聴神事、昨日の燈拜と続いていて、今日の霧追いで締めになる。ご神体である矢狩山に登って要所所で儀式をすることで神様に祈りを届けるの」

二人が神妙な顔で聞いているのを確認して後を続ける。

「普段は神官か巫女しか登れない矢狩山だけど、今日は別。神様に祈りを届けるために氏子衆と呼ばれる地域から選抜された人たちが同行するわ。氏子衆はあらかじめ決められた祠の前で暗くなるまで祈るのがつとめ。わたしは山を登りながら順に祠を巡って舞を奉納するのが仕事。その手伝いをするのがあなたたちよ」

話の矛先が突然自分たちに向けて、二人ともびくっとした。

「氏子衆とその先導はもう少ししたら出発する。わたしたちは一番最後に出るわ。時間がないから結構急いで登らないといけない。近道も使うわ。祠の位置は、二合目、三合目、五合目、六合目、八合目にある。矢狩山の頂上には本殿があつてそこがゴール」

「はあ……」

「うへえ……」

急いで山を登ると聞いて、二人は歯切れの悪い感想を漏らした。

「わたしが舞を奉納するとき、その舞台は限りなく神様に近い場所になる。その神域を穢すことは誰にも許されないわ。神域を区切るためにあなたたちは生きた境界線になってもらう。具体的というと、仕切りになるロープと布を持って舞台と氏子の間に立つてもらおう」

「……ここまで引っ張ってやることはそれですか」

「他にも雅楽の演奏とか先触れとかあるけど、あんた達にはできないでしょう?」

「そうですけど……」

円はなにか不満そうだった。

天満寺が手を挙げたので目線が促す。

「腕が疲れたらどうすんですか?」

「大丈夫、緊張してそんなの忘れられるわ」

「ええー?」

「もう時間がないからでるよ。質問は終わり」

「最後に一つ、いいですか?」

「何？ 天満寺」

「そういえば私、バイト代の金額聞いてないんですけど」

年の一度の大仕事の前に、金の話か。

「時給千円かどうか？」

「え……………」

「不満？ いっておくけど千円超えるようなバイト、そんなないわよ？」

非営利団体である神社のバイトとしては破格の値段である。よほど儲けている神社ならいざ知らず、法律に定められた最低賃金に毛が生えた程度なのが普通だ。勤続3年のベテラン巫女であろうとそれはあまり変わらない。

この二人は友達だし、うちが貧乏くさいとは絶対に思われたくないので、ちょっとイロをつけたつもりだった。見栄が悪いか。

「天満寺さん、本当ですよ。中学生ができるバイトにしては超高給ですよ」

わたしの顔色を察知したのか円がフォローする。

「あ、そうなの？ 私、バイトって初めてで……………」

ブルジョアめ。わたしなんかこれだけ家業を手伝ってるのに無給だぞ。

「もういいわね！ 外出て！」

二人を追い出す。外は相変わらずの濃霧だ。

「なんで裸足？」

天満寺が不思議そうにわたしの足を見るが、無視。自分の部屋まで行かないと靴もサンダル襪ぎ場の鍵をロックし、二人を先導する。キリカはふらふらと最後についてきていた。

「もう山に登り始めるんですか？ 登る前に靴を置いていきたくないんですけど」

「まだ登らない。わたしも普通の巫女装束で登ったりしないから、また別の場所に着替えるの。これからわたしの部屋行くから、靴はそこに置いて」と

飛び石を渡って、離れへ。

「お風呂の他に自分の部屋も専用があるんですか……………」

「いや、自分の部屋があるのって、それは普通だから」

途中でそんなボケとつつこみを入れあう二人。

玄関に設置されたカメラに視線をあわせると一瞬でスクリーンが行われてロックが解除される。

「靴はその辺に置いておいて」

玄関先の狭い空間に鞆を二つ置いておく。わたしはサンダルを突っかけた。

「じゃ、次は社務所の更衣室。こっちから来た方が近いから」

庭を突っ切って垣根から出る。獣道をしばらく登ると境内に出た。

話し声と玉砂利を踏む音が境内に人がたくさん居ることを知らせるが、乳白色の霧の奥で影がゆらゆらと揺れているだけで、まるで現実味がない。普段からここで暮らしている人間なら迷わないが、参拝客は拝殿がどこか解らずに右往左往して、オレンジ色の指示棒を持った警備の人が誘導していた。

二人は黙ってついてきている。いつの間にかキリカの姿が見えなくなっていた。

今日はずっとついてくるんじゃないのか。

社社の社殿はすべて職人の手による木造だが、社社の運営のために事務を行う社務所は普通の現代建築だ。入り口はガラスの自動ドアだし、中は多くの人が歩き回ってもすり減りにくいリノリウムの床である。

お守りや破魔矢などの授与所の裏手に正面玄関があり、普段ならそちらから入るのだが、今日の入りに前は氏子衆の待機場所となっていてすでに酒臭かった。なぜ酒臭いのかというと、老人が『力水』と称して持ち込みの日本酒を煽るからである。力仕事なんかないのに力水が必

要な理由は不明である。

とにかく、緋袴なしの白衣なんて姿を晒すのは恥ずかしいので、裏口から入ろうときびすを返した。

だが間が悪かったのか、一陣の風が吹いて霧を吹き飛ばし、ステテコに法被姿の元・円の契約恋人（ただし試用期間中に契約解消）である羽馬籠はまりゅうのすけ之介と目があつた。

茶髪の短髪は前に会ったときそのまま。身にまとう浮き雲の如き軽薄さもそのまま。

何でこいつがここにいるんだ。

「あー！ ミコヒメ様ー！」

「黙れチャラ夫！」

アホみたいな呼ばれ方をされて、思わず返事をしてしまった。

周囲の目が集まる。手ぬぐいを頭に巻いたお婆ちゃんが手を合わせてわたしを拝みはじめる。羽馬と似たような法被姿のおじいちゃんが酒瓶を持ったまま何か言ったが聞き取れなかった。

それぞれだべっていた他の人たちは、わたしを見ると次々に拳を宙に突き出して『オォー!!!』と雄叫びを上げ、また雑談に戻っていく。

「オウ！ すげーだろ、みんな盛り上がってるぜ！」

「ちよっと、羽馬。先輩に気軽に話しかけないでください。今ちよっと気が立ってるんですから」
 円がわたしの前に割り込んで、わたしの気分を勝手に表明する。

「なんだ、サツキじゃねーか。おまえこそこで何してんだよ」

「名前で呼ぶなど言っているでしょう？ 私は先輩の手伝いです。それよりあなたこそなんですか、その格好は？」

羽馬は背中を見せると、法被の袖をバツと張って見せた。

青地をベースに金糸銀糸で派手な鳥の縫い取りがしてあり、その下にはダイナミックな書体で『西山町内会氏子衆』と書いてある。

「今年も俺も氏子衆よ。これからは白若と呼びな」

アホか。それは氏子衆で最年少である若者の呼び名だ。偉そうに言うけど何も偉くないし。それより。

「さっきのなんなの？」

「？ なんか言ったっけ俺」

「ミコヒメ様とか、ふざけた呼び方したでしょうが」

「あーそれ!? 似合ってるんじゃないかね？ なんか坂木先輩ですごくお高くとまってる感じがする

しさ」

こいつ殴っていいだろうか。

私の場合、そう思ったときには手が出かかっているものだが、顔を張るために引いた手をがっしりと天満寺に押さえられたために、ぐぐつと変な声が出るだけでピンタは出なかった。

「ねえリユウ、お爺ちゃんが呼んでるよ！」

わたしが天満寺の腕を振り切ろうと力を込めていると、再び霧が包んだ氏子衆の中から羽馬より頭一つくらい小さい影がこちらにやってきた。

「あ？ なんだよトモ。じいさんが何だって？」

「呼んでるって、なんか酒瓶もって今すぐ連れてこいって言うってたけど」

「そっか、じゃサツキも先輩もまたな！」

「だから名前で呼ぶなど……！」

羽馬にトモと呼ばれた人影はこちらをちらりと見て元の列に戻ろうとしたが、円と天満寺であることに気づいたのか目と口を開けて寄ってきた。

「円さんと天満寺さんだったのか。誰かと思った」

「オッス」

わたしの腕を離れた天満寺は、ずいぶんとさっぱりした挨拶をした。

「あら、五条君も氏子衆なんですか？」

円が五条の法被を見て言った。

「うん、そうだよ。これ」

背中を見せる。羽馬と同じように『西山町内会氏子衆』と派手に刺繍がされていた。

「なんかそれ、ヤンキーのスタジャンみたい」

天満寺が正直すぎる感想を述べたが、五条とやらは朗らかに笑って同意した。

「あはは、僕もそう思うよ。これ作った人、本業はそっちらしいからね。……ところで、こちらの方は？」

五条が目で私を伺いつつ、円に訊く。

「知らなかったんですか？ 高等部一年で弓道部の先輩の坂木先輩ですよ。坂木先輩、こちら

はクラスメイトでサッカー部の五条智則君です」

「はじめまして、五条です」

「……どうも」

なんとというか、羽馬の友人とは思えない礼儀正しきである。丸顔で長すぎない黒髪に眼鏡を

かけた、純朴そうな男子である。育ちの良さが全身から沸き立つようであった。

「坂木先輩って今日の舞を踊る人ですよね？ 凄いなー」

ニコニコと邪気のない笑顔を向けられる。わたしの周りには居ないタイプだ。

「……………」

こういう、ドロドロした権謀術数に縁のなさそうな人を見ると弄りたくなる。無垢の入れ物に、少しずつずす黒い憤りを注ぎ込んでいくと凄く楽しいと思う。

「……坂木先輩、顔が悪い人になってますよ」

無表情な天満寺が腕をつつきながら耳打ちする。円は『正体見たり！』と言いたげな半笑いを浮かべていた。

「——ん、別に凄くない。単に生まれたときから練習してるだけだから」

「でもこんな晴れ舞台で披露できるなんて、凄いですよ！ 憧れちゃうなー」

クラリと目眩を覚えた。

「それじゃ、私達はこれから着替えるから、またね」

「先輩、これ以上は危険です。こちらへ！」

天満寺が強引に会話を終わらせ、円がわたしの手を取って入り口に向かう。

中に入ると、巫女や神官がばたばたとすり足で高速移動していた。その間をすり抜けるように抜けて、着付けの部屋に入る。

大きな姿見が三つ置かれた畳敷きの部屋だ。壁際に立てられた衣桁いこうにわたしの千早ちさや濃色こきらうの袴が掛けてある。

「遅かったな」

そしてその横には、和服を包んだ畳紙たたしを畳たたに並べたキリカがいた。

「……えーと、キリカさんって私達より後ろを歩いていましたよね？」

「……そんな気がするけど自信ない。羽馬に呼び止められたときに抜かれたかな」

「表で変なヤツに絡まれただけです。それより、二人の分の千早ちさってそれですか？」

わたしが畳紙を差して言うと、キリカは肯いた。

「天満寺、円、二人とも、その袋空けて中の着物を着て見せて」

「あ、はい」

「うわ、これサラサラする」

二人は取り出した千早を羽織って紐を軽く結わえた。長めの袖を軽く握ってわたしの様子を伺う。

「先輩、これで大丈夫ですか？」

「ちょっと、回ってみて」

ゆつたりと結んだ天満寺は着物を着慣れているような印象で特に問題は見あたらない。円のほうはというと、折り目が汚かったり、紐が必要以上にきつく縛られていたりで全体的に不格好である。

「よし、天満寺は問題ない。円のは、キリカさん、ちょっと直してもらって良いですか？」

円が直されている間に袴をつける。色は緋色ではなく、濃色というくすんだ紫の伝統色だ。

緋色ほど鮮やかではないが、神官がこの色を身につけるためには神社の序列の中でもある程度高くないと許されない。わたしは巫女なので神官の決まりには当てはまらないのだが、この色を使えるのはこの神社でわたしだけである。

また、千早もわたし専用の特別な作りで、天満寺や円の着ている物とは生地も模様も違う。

最上級の正絹を使って職人が手縫いで仕上げるために、格も値段も桁が変わるレベルだ。汚すとクリーニングも出来ないけつたいな代物である。

一財産を身につけて振り返ると、円の直しも終わっていた。

「坂木先輩の袴、あんまり可愛くないですね」

天満寺は正直である。

「……伝統なんだからしょうがないの。あとかんざしだけか」

衣装一式がしまい込んである箆筒を開き、適当なものを出して二人に放る。

「これ、どうやってつけるんですか？」

一般的なかんざしは髪をとめるために針がついているが、神社のかんざしは飾りを額に固定するものなので髪をとめる機能はない。後頭部まで届く長い針金で頭に固定する。

そのへんはキリカがやってくれていた。

二人のつけたかんざしは、うちの神社の巫女が普段からよく使う、梅花に銀のすだれがついたものだ。額で銀の飾りがきらきらと光る。

「わー綺麗ですねー」

「綺麗だけど目の上で光るとちよつと気になる」

箆筒から自分用のかんざしも出す。いつも髪をまとめるのに使っている髪留めの出番は、今日は無い。下ろした髪の毛を丈長たけながで結び、花のない金枝のみの額金具をかんざしで止める。金枝のみのシンプルな飾りは冬の神を表すんだそうだ。

キリカに見てもらおう。

「わたしはどうですか？」

「——大丈夫だ。どこに出しても恥ずかしくはない」

これで終わり。準備は整った。時間は十一時三十分差し掛かろうとしている。

「よかった。このあと、控え室で食事を取ったら登りはじめるわよ。夕方までかかると思うから水分も取っておいてね」

「……そんなにですか」

「……私、運動得意じゃないんだけどな」

二人の声はすでに疲れているようだった。